

## 「女が肩から網袋を掲げる」ということ ——パプアニューギニア・アベラム社会のジェンダーの変化——

新本万里子

### 1. はじめに

本論文は、ジェンダーの変化を、モノを使用する行動様式の変化から明らかにすることを目的とする。具体的にはパプアニューギニアにおける網袋の掲げ方の変化に関する語りを手掛かりに、ジェンダーの変化について考察する。衣服や布を身に着ける行為は、ジェンダーや政治的主張、自己表現の手段にもなる。本論文で扱う網袋も、身に着けて携帯されることから、衣服や布のような表現の手段になりえと考えられる。

メラネシアにおいて、網袋を含む物質文化は、大きく三つの文脈において研究されてきた。第一に、19世紀に始まった広義の物質文化研究である。博物学的関心や進化論的関心から、物質文化の収集、分類が行われ、網袋も収集の対象となった。しかし、20世紀前半の構造機能主義の台頭以降、文化人類学の中心的課題は親族研究へと移り、物質文化への関心は薄れた。モーレン・マッケンジー (Maureen Anne MacKenzie) によれば、当時の文化人類学的研究の主流が、技術や物質文化を対象にしていなかったばかりではなく、男性中心主義的な観点のために、女性だけを象徴すると見做された網袋は、人類学的注意を払う価値がないとみなされた [MacKenzie 1991: 21]。

網袋を含む、主に女性が作る物質文化が、再び文化人類学的研究において取り上げられるようになるのは、フェミニズム人類学者による再検討が始まってからのことである。ジェンダー研究を、第二の研究の脈絡と位置付けることができる。トロブリアンド島におけるバナナの葉の束とスカートの女性による分配を分析したアネット・ワイナー (Annette Weiner) は、先行する人類学者の民族誌に男性パイアスが潜むことを批判した。その民族誌なかでワイナーは、マリリン・ストラザーン (Marilyn Strathern) の民族誌にお

ける網袋の扱いについても、理論的バイアスと男性中心主義的な観点のために網袋交換の重要性を見落としていると批判した [Weiner 1976: 13]。それに対しストラザーンは、彼女が調査を行ったハーゲン地域の網袋が女らしさを象徴し、セクシュアリティや子を産み育てることと結び付いていることを認めつつも、トロブリアンド島のバナナの葉の束とスカートの象徴性を普遍化してハーゲン地域の網袋の象徴性を理解することはできないという反論をした [Strathern 1981]。

ワイナーとストラザーンの議論に対してマッケンジーは、網袋が女性だけのものであるという前提自体を批判し、網袋が製作、使用される過程に注目した。マッケンジーによれば、テレホル (the Telefol) では、女性が網袋の基本的な形を作る。そして、男性は、姉妹や母が作った網袋の表面に様々な鳥の羽で装飾を施し、その網袋を男性の成人儀礼の場で使用する。女性によって使用される網袋は、子の運搬具であり、子や家族を養うための農産物の運搬具でもある。網袋は、「母らしさ」を象徴している。その網袋に装飾を施したものを、男性は成人儀礼の場で用いるのである。この関係は、一見、男性による女性の貢献の搾取のように見えるが、そうではない。テレホルの男性は、男性の領域で使用される網袋が、女性によって作られたものであること、女性の貢献があることを否定しない。西洋のジェンダー・シンボリズムならば、男性の政治的、儀礼的領域が、女性の日常の領域よりも優位なものとして現れる。それに対して、テレホルの男性による網袋の使用は、網袋に象徴される女性の生殖力を否定することなく、男性の生殖力をも象徴する。装飾された網袋は、両性具有のものであり、両性の役割の相補性と相互依存性を象徴している [MacKenzie 1991]。

近年、近代化の過程における物質文化の変化に注目した研究も行われており、これを第三の研究の脈絡と位置づけられよう。網袋に関してはマッケンジーが、パプアニューギニアにナイロン糸やウール糸が導入された当時の様子について報告している。マッケンジーによれば、多様な文化的背景を持つ人々が集まった首都ポートモレスビーにおいて、女性たちが、カラフルなナイロン糸やウール糸を小売店から購入し、ほぼ競争的な状態でデザインを真似し、自己表現を始めた [MacKenzie 1982: 21-22]。

オセアニアでは、男性の儀礼の場において、女性の生殖力が象徴されたものがしばしば使用される。ニコラス・トーマス (Nicolas Thomas) は、男性の儀礼の場における女性の生殖力を示すものの使用についての研究史をまとめた章の最後で、キリスト教への改宗とその他の開発の結果として、女性を作る物資文化に変化が起こったと述べている。彼によれば、網袋を編むためのルーピングの技術が、以前にはなかった地域にまで普及した。網袋は、パプアニューギニア人としてのアイデンティティと女性らしさを象徴するものとなった。一方で、網袋の多様性は、国内においては地域的アイデンティティを示すものとなった [Thomas 1995: 128-129]。

そしてニコラス・ガルニエ (Nicolas Garnie) は、ウール糸で編まれた網袋について、新たなデザインの創造や、デザインが名付けられる過程、交換などを描き、パプアニューギニアの伝統的生活にルーツをもつ網袋が、近代的生活に適応するものとなったことを述べている [Garnie(ed.): 2009]。この論考のなかでガルニエは、伝統的な網袋の網の目から、農作物や嗜好品などの男女が生産するものが見えていたのに対し、ウール糸の網袋の網の目は詰まり、その中身が見えなくなったことに言及している。伝統的な網袋の網の目から見えたものは、社会的義務を果たす能力のあることを示していた [Garnie(ed.) 2009: 19]。しかし、都市の生活において人々は、泥棒や強奪を恐れて中身の見えない網袋を作るようになった。村を離れて都市部に暮らす個人は、伝統的な社会的ネットワークから離れている。中身の見えない網袋の表面には、「虹」や「十字架」、「コンピュータデザイン」などという名前の様々デザインが編み込まれ、文字も編み込まれるようになった。網袋は、社会的、美的メッセージを発するようになったのである [Garnie 2009(ed.): 21-23]。

以上のように、近代化の過程における網袋の変化を扱った研究は、素材やデザイン、製作された網袋の質の変化に注目し、女性の主体性やプライバシーの覚醒に言及している。しかし、こうした研究は、先行するジェンダー研究の成果に結びつけられて論じられることはなかった。筆者は、近代化の過程における網袋の変化を、ジェンダーの変化と連動しているのではないかと、この観点から検討する必要があると考える。その根拠は、ウール糸で製作さ

れるようになった小型の網袋の、女性による上げ方の変化にある。

マッケンジーによれば、網袋はニューギニア島内陸部に広く分布している [MacKenzie 1991:1-5]。その多くの地域において、女性はいつも、大きな網の目の網袋を、紐を前頭部にかけて背負うように運ぶ。一方、男性は、より小さい網袋を肩から提げて携行する [MacKenzie 1991:18]。つまり、網袋の種類とその上げ方の違いが、目に見えるジェンダーの指標となっているのである。しかし、近代化の過程でウール製となった小型の網袋を、男性ばかりではなく、女性も肩から提げる姿を、現在ではパプアニューギニア国内の至るところで見ることができる。

マイケル・オハンロン (Michael O'Hanlon) は、ワギ谷において自ら収集し、ロンドンの博物館で展示した網袋について、次のような女性の言葉を紹介している。「弾薬帯のように網袋を提げることは、夫の役割を乗っ取ろうとする女のサインである。よだれ掛けのように首にかけた網袋は、売春婦のマークである」<sup>1</sup> [O'Hanlon 1993: 72]。この網袋はウール糸の網袋で、「弾薬帯のように」とは網袋を肩から提げた格好であり、女性が男性と同様のスタイルで網袋を提げ始めたことを示している。「涎掛けのように」とは胸の前に網袋を垂らした格好を指している。ウールという新しい素材で製作された網袋を、ワギ谷の女性は男性と同じように肩から提げて使用しているのである。

本論文で分析の対象とする地域においても、伝統的には、男性は肩から網袋を提げ、女性は頭から提げるという上げ方の男女差が認められたという。しかし、ある時期、肩から網袋を提げる女性が現れ、「女は肩から網袋を提げてはいけない」という言葉が聞かれたという。パプアニューギニアがオーストラリアから独立したところから、次第に、こうした批判は聞かれなくなったとの説明を現地でも受けた。本論文では、網袋の素材やデザインの変化にも言及するが、とくに、網袋の上げ方の変化に注目し、近代化の過程におけるジェンダーの変化について検討したい。女性による網袋の上げ方の変化は、オハンロンや筆者の調査する地域だけではなく、パプアニューギニアの各地で広く見られた現象である。本論文で提示できるのは一地域の事例だが、同時期に広くパプアニューギニア国内で起こっていた変化を、ジェンダーの観点

から考察できると考える。

以下では2章で、調査村とそこで使用されている網袋について概要を述べる。3章では、網袋の揚げ方の変化についての村人の語りを提示する。4章では、3章で紹介した語りから、網袋の揚げ方について女性が批判された時期を特定し、それが現地社会のどのようなジェンダーの変化を表していたのかを検討する。5章で、研究史に照らしてまとめを行う。

## 2. アベラム社会の網袋

### (1) 調査村の概要

本論文で対象とするのは、東セピック州 (East Sepik Province) に居住するンドウ語族アベラム語の話者 (the Abelam 以下、アベラムとする) の網袋である。アベラムは、プリンスアレキサンダー山脈南部からその麓の平原にかけて居住している。方言の違いから、アベラムの居住する地域のうち北西部に居住する人々をサム (*samu*)、北東部に居住する人々をマム (*mamu*)、南部に居住する人々をカム (*kamu*) と互いに呼び分けている<sup>2</sup>。慣習にも細かな差異を見出すことができる。網袋にまつわる慣習とデザインについては、サムとマムの地域で製作される網袋の共通性が高く、カムの地域で製作される網袋とは、素材、技術、慣習において、細かな違いを見出すことができる。

筆者が滞在したのは、サムの地域に位置するマプリック地区ニヤミクム村 (Nyamikum, Maprik District) である<sup>3</sup>。ニヤミクム村は、州都ウェワクから約120キロ西に位置する。マプリック地区の行政と経済の中心的な町であるマプリックの北東部に接している。住民は焼畑農業を主な生業とし、丘陵部でヤムイモを中心に、タロイモ、バナナ、葉物野菜などを栽培している。谷部にはサゴヤシ林をもち、その澱粉採取も補助的に行う。丘陵部で焼畑農業を営むアベラムの女性たちにとって、網袋は農作物などを運搬するのに欠かせない道具である。

ニヤミクム村の2007年の人口は、筆者による世帯調査で787人である。村内は起伏のある地形で、尾根や山腹、谷部の川沿いに集落が点在する。それら集落が集まってニヤミクム村を構成している。2007年の集落数は大小あわせて58であり、このうち11か所は中心に広場をもっている。広場のある集

落は構成員も比較的多く、各クラン<sup>4</sup>の中心的集落としての性格を備えている。筆者は、Sクランの中心的集落であるK集落で住み込み調査を行った。このK集落の2003年6月から9月の人口は、男性23人、女性21人、計44人であった。女性21人のうち、20才以上の女性は14人である。このうち、調査中に不在だった40代の女性と、高齢のため聞き取りの難しかった70代の女性を除く、12人の女性が保有する全ての網袋133枚について大きさを計測し、素材、デザイン名、製作者などの聞き取りを行った。また、同年、K集落の女性の協力を得て自身で網袋を製作した。

次節では、K集落で収集した網袋に関する資料から、網袋の種類と使用、揚げ方を見ていく。なお、網袋の製作技術や網袋にまつわる慣習については、ニヤミクム村内のK集落以外の集落でも随時観察を行っている。K集落と他の集落の網袋には、製作技術においても、使用方法や慣習においても違いは認められない。

## (2) K集落の網袋

表1は、網袋の種類と、種類ごとの大きさを示したものである。網袋の種類は、K集落の女性たち自身に分類していただいた。その結果、網袋はグラウット (*gĕlawut*)、ジャンバウット (*jabawut*)、マンジュウット (*ma.jĕwut*) の三種類に分類された。まず、グラウットとは、三種類の網袋のなかでもっとも大型の網袋である(写真1参照)。グラウットのグラ (*gĕla*) とは「大きい」こと、ウット (*wut*) とは網袋を意味する。ヤムイモや薪の運搬に使用される。ヤムイモの植え付けと収穫は親族総出の相互扶助による作業となっており、グラウットの使用頻度は農繁期に高まる。グラウットを使用するのは女性のみで、男性は使用しない。女性たちは、大量のヤムイモを入れたグラウットの紐を前頭部にかけて、背中に背負うようにして運搬する。

表1 網袋の種類と大きさ(2003年9月)

網袋の種類	網袋数	口の部分の大きさ	底部の大きさ	深さ	紐の長さ
グラウト( <i>gəlawut</i> )	22	44.5~95.0cm	100.0~205.0cm	52.0~74.5cm	51.0~123.0cm
ジャンバウト( <i>jabawut</i> )	56	30.0~72.0cm	44.0~133.0cm	32.0~60.5cm	36.0~92.0cm
マンジュウト( <i>majəwut</i> )	55	24.0~61.0cm	27.5~102.0cm	20.0~47.5cm	34.0~85.5cm



写真1 グラウト



写真2 ジャンバウト



写真3 子の眠るジャンバウト



写真4 マンジュウト



写真5 サーニンのデザイン

第二に、ジャンバウトとは中型で、ヤムイモやタロイモなどのイモ類、バナナ、葉物野菜などの運搬と、子どもの運搬、揺りかごに使用される網袋である(写真2、3参照)。ジャンバウトのジャンバ(*jaaba*)とは「飾る」ことを意味している<sup>5)</sup>。女性たちはジャンバウトを携えて、毎日のように畑へ出かけ野菜を収穫する。市場への野菜の運搬にもジャンバウトが使用される。子どもが生まれると女性たちは、乳児をジャンバウトに入れて運搬する。木陰に揺りかごとして提げておくこともある。ジャンバウトは、女性たちが毎日の生活を営む上で欠かすことのできない網袋である。ジャンバウトもグラウトと同様に女性のみが使用し、前頭部に紐をかけ背中側

に提げて用いられる。

第三に、マンジュウットとは小型で、嗜好品の檳榔樹の実<sup>6</sup>や煙草、小銭、その他の小物などをいれて携行される網袋である(写真4参照)。マンジュウットのマンジュ (*maajë*) とは、「糸」と「線」を意味し、サム方言の人々にとっては「我々」を意味する言葉でもある<sup>7</sup>。現在では、男性も女性もマンジュウットを肩から提げる。しかし、村人によれば、かつてマンジュウットを肩から提げるのは男性のみで、女性はグラウットやジャンパウットと同様に、マンジュウットも頭から背中側へ垂らして使用したという。かつて、「女は肩から網袋を提げてはいけない」といわれたのは、このマンジュウットの提げ方についてである。次章では、マンジュウットの提げ方の変化について、村人の語りを見ていく。

### 3. 網袋の提げ方に関する語り

#### (1) 提げ方の変化について

本節では、女性たちがマンジュウットを肩から提げるようになったことについて、村人がどのように語っているのかを見ていく。まず、事例1と事例2は、女性たちが網袋を肩から提げ始めた当時を覚えている70代の男性の語りである。

事例1 「独立したころ女たちが変わった。網袋を肩から提げる (*wut kalu*)、短パンをはく、ティーシャツを着る。昔は、マンジュウットも頭から提げて (*wut ti*)、(体には) 布を巻いたものだった。ルルアイ (*luluai*)、トウルトウル (*tultul*)<sup>8</sup>の頃にはな。お前は男じゃない、網袋を肩から提げてはいけない、頭から提げるものだと言ったものだ。独立してからこういう言い方をしなくなった。」(PA 70代 男性 2014年9月)

事例2 「女は肩から網袋を提げてはいけない」と言ったのは1970年代だ。80年代には次第に言わなくなった。90年代にはもう言わなかったな。女たちがマンジュウットを肩から提げるようになったのは、白人女性 (*wait meri*) の真似だったのだろう。」(AR 70代 男性 2006年8月)

次の事例3と事例4は、同一人物の語りである。インフォーマントは50代の男性である。彼が少年の頃、マンジュウツの揚げ方の変化は起こっていたと考えられる。

事例3 「もしも女が網袋を肩から提げて広場を横切ろうものなら、お前は男か、網袋を肩から提げて歩くなんて、と言われただろう。マンジュウツにはタバコの葉と檳榔樹の実、編みかけの網袋と糸が入っていたものだ。それを女たちは頭から提げて歩いた。グラウツと同じように。女はいつも網袋を頭から提げたものだ。もしも網袋が多すぎれば、赤ん坊の入った網袋を首から提げたものだ。昔はみんな呪術を恐れた。男がボスだからだ。女たちが言うことを聞かないと呪術をかけられた。女は男の言うことを聞かなければならなかった。JO ぐらいが、網袋を肩から提げた最初の世代だろう。」(BO 50代 男性 2014年9月)

この語りは、とくに広場が、女性に対する規範の強く表れる場であったことを教えてくれる。村の住民にとって重要な取り決めを行うときには、男たちは広場に面した建物の中に座り、女たちは建物の外に、広場を囲むように座る。かつて、この広場に面した建物は、男性の就寝場所でもあったという。この他、成人儀礼の場となる精霊堂や、農産物の実りを祈る石が祀られた建物など、男性に関わる建物が広場の周囲には立っていた。

なお、この語りのように、呪術は、社会的変容が起こる以前の男性の権威について語るときに、しばしば持ち出される。とくに、年長の男性が強い呪術的力を持っており、恐れられていたという。

事例4 「今は呪術がなくなって、女たちは好きなように網袋を提げることができるようになった。「女は肩から網袋を提げてはいけない」と誰が言うだろうか、誰も言わない。昔、男たちは喜ばなかった。なぜなら女だからだ。子どもも食べ物も、こんなふう（肩から）提げることではできない。見た目にも悪い。「女は肩から網袋を提げてはいけない」と言った

のは1960年代だ。言わなくなったのは1980年代だろう。RUやJOの若い頃には言われただろうが、ROの頃にはもう言わなかった。」(BO 50代 男性 2014年9月)

事例4の語りに登場したRU、JO、ROは姉妹である。また、事例3のJOと事例4のJOは同一人物である。3人のうち、最も若いROに聞き取りを行ったのが事例5である。

事例5 「網袋を肩から提げてはいけないとは、私たちのころにはもう言わなかった。RUのころには言っただろうが。RUのころは、市場でよその村の男と知り合って、女がその男についていってしまうと、父親も母親も探し回ったものだ。探して、その村まで行って娘を取り返してきたそう。私たちのころには、そりゃ親は探すけれど、取り返すというほどまではね。私たちが若いころには、マプリックの市場やネリクム(Nelikum)、クニンビス(Kunimbis)<sup>9</sup>などで、ダンスパーティをやっていた。1984年から1989年ごろだ。金曜の夜は、ダンスパーティが開かれていた。村の男たちと連れ立って行き、ダンスして、朝になってから帰って来たものだった。」(RO 50代 女性 2006年2月)

事例4と事例5からは、ROの若い時代には「女性は網袋を頭から提げるべきである」という規範が弱まっていたことが分かる。次節では、ROの姉たちが若い時代に、網袋の紐を前頭部にかけて提げる姿がどのように考えられていたのかを見ていく。

## (2) 伝統的な提げ方について

事例6と事例7は70代男性、事例8は推定70代から80代前半の男性の語りである。事例6は、女性が網袋を肩から提げる姿がどのように見えていたかを語っている。事例7と事例8は、人生儀礼の場で使用する網袋の提げ方に言及している。

事例6 「(網袋の紐を前頭部にかけて背負うように掲げる姿の女は、) 母親と一緒に座っている女だ、母親と一緒に料理して食べて、頭から掲げた網袋の上に薪をのせて母親と一緒に歩く。いい女だ、あの女と結婚しよう、そう言ったものだ。働く女。そういう女はいい母親になる。夫と子どもをよく世話する。」(PA 70代男性 2014年9月)

事例7 「女は(女の)秘密を知ったら、サーニン(*saanim* 赤と黒の横縞の三角形が連続したデザイン)の網袋(写真5参照)を掲げることができた。男も(男の)秘密を知ったら、サーニンの網袋を掲げることができた。」(PA 70代 男性 2014年9月)

事例8 「子どものころから、網袋の掲げ方は決まっていた。男は肩から、女は頭から。最初は白い小さな網袋。むかしは白い網袋か、グラエ(*glae* 二本の線が入ったデザイン)の網袋ぐらいしかなかった。昔は、女は秘密を知ったらサーニンの網袋を掲げた。男もすべての秘密を知ったら、サーニンの網袋を掲げた。」(DA 推定70代後半～80代前半 2014年9月)

事例7と事例8に登場する女の秘密とは初潮を指し、男の秘密とは男性の成人儀礼で開示される笛や祖先像を示している。以上の語りを資料として、次章では網袋の掲げ方に変化が現れた時期がいつかを推定し、当時起こっていた社会的変化について述べる。そして、網袋を女性たちが肩から掲げ始めたという変化が何を意味していたのかを考察する。

#### 4. 網袋の掲げ方の変化とジェンダー

##### (1) 網袋の掲げ方に変化が現れた時期

本節では、第3章で紹介した事例を手掛かりに、マンジュウツトの掲げ方に変化が起きていた時期について考察したい。

事例1では、女性たちが網袋を肩から掲げ始めたのが「独立の頃」からだとされ、それと対比されて、網袋の紐を前頭部にかけて掲げていたのが「ルライ、トゥルトゥルの頃」とされている。現在のパプアニューギニアが国

家としてオーストラリアから独立したのは1975年のことであり、「ルルアイ、トゥルトゥルの頃」とは植民地統治下にあった時代のことを指している。

事例2では、「女は肩から網袋を提げてはいけない」と聞いたのは1970年代であり、次第に下火になったのは80年代、全く聞かれなくなったのが90年代だと述べている。事例4では、「女は肩から網袋を提げてはいけない」と言ったのは1960年代であり、終息したのは1980年代と述べられている。事例2と事例4から、「女は網袋を肩から提げてはいけない」という言説がほぼ終息したのが1980年代と推定される。ただし、この言説が聞かれたという時代については、1960年代と1970年代というずれがある。

事例3と事例4に登場するRU、JO、ROの年齢は、RUが推定60代後半から70代前半、JOが60代、ROが50代前半である。1960年代から1970年代には、RUは20代から30代で、JOは10代から20代、ROは0代から10代であったと推定される。この女性たちが例として挙げられることから、網袋を肩から提げるようになったのは、当時、女性たちの中でも比較的若い世代であったことが推定できる。

現在の彼女たちの網袋の提げ方を観察すると、RUは、座って世間話をしている間マンジュウツを傍らに置いているが、そろそろ出発しようと立ち上がる時、網袋の紐を自然に頭の方へ持っていく。マンジュウツを肩から提げることもあるが、頭から提げる動作は、彼女にとって身体化された自然な動作である。JOとROは、マンジュウツを肩から提げていることが多い。彼女たちがマンジュウツを頭を持つていくのは、両手を他の作業に使用する必要があるときのみである。姉たちに比べてROが「女は肩から網袋を提げてはいけない」という言説の対象とならなかったのは、1960年代には彼女がまだ幼い子どもであったからと考えられる。また、彼女が10代から20代になる1970年代から1980年代には、すでに彼女よりも年長の世代が批判の対象となった後であったと推定される。RU、JOが言説の対象となった世代であるが、現在でもRUがマンジュウツを頭から提げることから考えて、彼女の若い時代には、マンジュウツを肩から提げる女性は多くはなかったと推定する。マンジュウツを肩から提げる女性が増加するのは、JOの世代からだと推定する。

マプリック町の建設が始まったのは、1930年代の金鉱の発見を契機にしている。当時、鉱山関係者とともに、ミッションが入ってきたという。金鉱は山中に発見されており、そこへアクセスできる距離にあり、西洋人にとって比較的居住しやすい開けた地形のマプリックが、鉱山関係者とミッションの基地として選択された。その後、第二次世界大戦を経て、1950年代にはピーナッツや米、コーヒーなどの換金作物が導入された。当時、西洋人の経営する商店では、布や塩、砂糖などが販売されていた。また、1950年代には、海岸部のプランテーションへの出稼ぎ者が募られ、ニヤミクム村の男性のなかにも出稼ぎに行った者がいた。

そして、1964年には、現地で生産した農産物を販売できる市場が導入された [Stent1984:122]。この市場で、女性たちは農産物を販売するようになった。1960年代、マプリック地方には、約200人も西洋人が住んでいたという [バーチル 1986:27]。政府関係の役人や宣教師、医師、教師などとその妻や子どもたち、看護婦の女性であった。同時期、マプリック町に近いニヤミクム村には、SIL (Summer Institute of Linguistics) という聖書を現地の言葉に翻訳し、その内容を布教する団体が入り活動していた。SILの職員は、妻と3人の子どもを連れてきてニヤミクム村に住んでいたという。SILとニヤミクム村住民の関係は良好であったという。1960年代という時代は、ニヤミクム村の女性たちにとって、網袋を肩から提げるスタイルの見本となる西洋人女性が身近にいたばかりではなく、行政指導によって導入された市場で農産物の販売が始められた時期でもある。

マンジュウツを肩から提げる女性が出現し、それが批判の対象となったのは、市場が導入され、ニヤミクム村の女性たちも現金収入を得るようになった1960年代のことと考える。そして、1970年代には、マンジュウツを肩から提げる女性が次第に増え、そのスタイルが1980年代までに定着したと考える。事例1では、パプアニューギニアの独立のところが女性たちの変化の起点として語られているが、社会的な変化について聞き取りを行っていることと独立が持ち出されることはしばしばある。事態は連続的に変化していたと考えられ、記憶に残る当時の大きな出来事である独立が、変化の起点として語られるということであろう。

## (2) 伝統的な網袋の揚げ方とジェンダー

前節では、女性たちがマンジュウツを肩から揚げ始めた時代を特定したが、本節では、マンジュウツの揚げ方に変化が起こる以前、男女の網袋の揚げ方の違いが何を表していたのかを考察したい。

前述したように、女性はグラウツ、ジャンバウツ、マンジュウツの全てを前頭部に紐をかけて、背中に背負うようにして運搬していた。グラウツにはヤムイモや薪、子豚、ジャンバウツにはヤムイモをはじめとした作物と子を入れた。マンジュウツには檳榔樹の実、たばこの葉、編み掛けの網袋が入っていた。ニヤミクム村の女性に対して、「重い網袋を運べるぐらい強い女」という言葉は褒め言葉である。事例6では、網袋を頭から揚げた女性は働き者であり、よい母親になることが語られていた。網袋を女性が頭から上げる姿は、母としての役割を象徴していたと考えられる。

なお、アベラム語で網袋をウツ (*wut*) ということは前述したが、アベラム語では女性の体内の子宮もウツ (*wut*) である。「子どもが生まれる前は、このウツ (子宮) で育て、生まれたらこのウツ (網袋) で育てる」という。網袋の伸縮性は、子宮の伸縮性と似ているという。網袋は、母としての役割だけではなく、女性の生殖力をも象徴していると考えられる。

一方、男性の使用する網袋はマンジュウツのみである。男性は、網袋の紐に一方の腕と頭を通して斜め掛けしたり、一方の腕だけを通して肩に揚げたりして携行する。檳榔樹の実、たばこの葉などの嗜好品の他、呪術に使用する道具をマンジュウツに入れて携行する男性もいたという。男性が肩から上げる網袋はマンジュウツのみだが、網袋を使用しない運搬も視野に入れて考えると、肩での運搬が、男性のスタイルとして考えられていることがわかる。男性は、農作物や子、仕留めた獲物、建物の建築に用いる木材などを肩に担いで運ぶ。大型の獲物や、1mを超すような巨大なヤムイモは棒に吊るし、男性二人で棒を肩に担いで運ぶ。つまり、前頭部での運搬が女性のスタイルとなっているように、肩での運搬は男性のスタイルとなっているのである。男性は、農産物や子、木材や獲物を肩に乗せて運べるほど強くなければならない。

このような運搬スタイルの男女差は、子どもの網袋の揚げ方の違いにも表れる。子どもには、小さな無地の「白い網袋 (*waama wut*)」が与えられたという。男児は肩から網袋を揚げ、女性は前頭部から掲げるものだった。男女とも成長するにつれて、網袋も大きくなる。網袋製作に化学染料が用いられるようになる以前は、サーニンのような複雑なデザインの編み込まれた網袋は多くはなかったという。ほとんどの網袋は、無地の「白い網袋」か、平行線などの単純なデザインが編み込まれたものであったという。その中で、事例7と事例8で語られたサーニンのデザインの編み込まれた網袋(写真5参照)は、目を引く網袋であった。サーニンのデザインの網袋は、前述したように男女の人生儀礼や精霊堂の新築式で用いられる網袋だった。

女性に初潮がくると成女儀礼が催されたが、その際、初潮を迎えたばかりの少女が頭から掲げたのがサーニンのデザインの網袋だった。成女儀礼では、「重い網袋を背負えるほどの強い女性になるように」と諭されたという。また、男性の成人儀礼の場でもサーニンのデザインの網袋は使用されていた。成人儀礼は、四階梯までであった。第一階梯の儀礼はウルク (*wulku*) といい、7才から10才ぐらいの男児に行われた。男児は、7才から10才ぐらいまでに、それまでの母親との同居生活から離れ、父親との同居生活へ移っていく。第二階梯の儀礼はクッタクワ (*kutakwa*) といい、口髭が生えそろう10代後半から20代前半の若者に行われる。第三階梯の儀礼はグワルドゥ (*gwaludu*) といい、儀礼用ヤムイモ<sup>10</sup>の栽培を始める30代の男性に行われる。第四階梯の儀礼はプッティ (*puti*) であり、聞き取り時に事例として挙げられた男性の年齢にばらつきがあったため判然としないが、40代にはプッティの段階に達していたと考えられる。プッティに達した男性は、儀礼用ヤムイモの栽培と交換で力を発揮した。第四階梯までである成人儀礼のうち、第三階梯と第四階梯に達した男性は、サーニンのデザインの網袋を肩から掲げることができたという。この階梯に達した男性は、成人儀礼の場だけではなく、日常的にもサーニンのデザインの網袋を肩から掲げることが許されたという。そして、その妻たちも、サーニンのデザインの網袋を頭から掲げることができたという<sup>11</sup>。

子守や農作業などの日常の場面でも、成女儀礼の場でも、女性は網袋を頭

から揚げた。網袋を女性が頭から掲げる姿は、子を産み養う母としての姿を象徴していたと考えられる。一方、男性は、日常的にも、成人儀礼の場でも、網袋を肩から揚げた。第一義的に母としての女性の役割を象徴している網袋が、成人男性の肩に掲げられる。サーニンのデザインで網袋を男性が掲げるのは、成人儀礼の第三階梯以上に達したときであり、男性が肩から網袋を掲げる姿は、農産物の生産力を示していたと考えられる。そして、男性は、第三階梯に達するまでに、子を一人か二人持っているのがよいとされている。儀礼用ヤムイモ生産に関わる男性は、子をもつ能力もある男性である。

### (3) 女性が肩から揚げた網袋が象徴しているもの

前節では、伝統的な網袋の揚げ方の違いが、男女のどのような関係を象徴していたのかを検討した。女性が頭から揚げた網袋は、女性の生殖力や母としての役割を象徴していた。そして、男性が肩から揚げた網袋は、男性のヤムイモ栽培者としての役割や、生殖力をも象徴していた。本節では、女性が肩から掲げられるようになったマンジュウツが、何を象徴していたのかを検討する。

網袋の素材に関する聞き取りでは、1960年代にはまだ、化学染料も、ナイロン糸やアクリル糸<sup>12</sup>もほとんど流入していなかった。女性たちによれば、化学染料がマプリックに入ってきたのは1970年代である。ごく少数だが、1960年代のこただという者もいる。そして、化学染料よりも遅れて、ナイロン糸とアクリル糸が1980年代に入ってきたという。なかには、1970年代のこただったという女性も少数いる。アクリル糸の流入と同時に、この頃、アクリルで編んだ高地地域のデザインの網袋も流入している。

素材やデザインに関する聞き取りから推定できるのは、1960年代には、ほとんどの網袋は、伝統的な技術で製作された植物繊維製<sup>13</sup>の網袋であったということである。染色は、草木染<sup>14</sup>で行われていた。マンジュウツも、口の部分よりも底部が大きく、グラウツツやジャンパウツツと相似形であった。1970年代には、商店や市場で化学染料が手に入るようになった。草木染に比べて手軽に鮮やかに染まる化学染料に、女性たちは心惹かれた。市場で農産物の販売で得た現金をやりくりし、化学染料を購入した。サーニンのデザイ

ンを編み込むためには、赤い糸を沢山必要とする。草木染のころには、染色の難しさから、サーニンのデザインを編もうとしない女性は沢山いたという。「白い網袋」や単純なデザインの網袋で、日常生活は事足りたのである。しかし、化学染料が入ってくると、その鮮やかさに心惹かれて、以前はサーニンを編めなかった女性まで、サーニンを編む技術を習得しようとするようになったという。男女の人生儀礼の場で用いられていたサーニンのデザインの網袋が、儀礼の場ではなく、市場や教会など、町へ行くための網袋に使用されるようになった。さらに 1980 年代には、アクリル糸とともに、高地地域で考案された様々なデザインの網袋が流入してくる。マンジュウツトは、しだいに、それまでの口の部分よりも底部が大きい形から、高地のデザインが編み込まれた正方形に近いものに変化していった。

1960 年代、マブリック町の市場で農産物を販売するようになった女性たちは、網袋を肩から提げた西洋人女性をみかけることも珍しくはなかった。その中で、女性たちはマンジュウツトを肩から提げ始めたと考えられる。そして、徐々に、その実用性からマンジュウツトを肩から提げる女性がでてきたと考える。市場で農産物を売るためには、農産物の入った重いジャンバウトかグラウトを頭から提げて運搬しなければならないが、市場を歩き、教会や学校へ行くためには、小型のマンジュウツトで事足りる。

女性たちにとって市場は、村の中とは異なる刺激のある空間であった。市場の近くには教会や学校、病院があり、西洋人や他村の人、言語の異なる人とも出会うことができた。事例 5 に示したように、1980 年代には市場は男女の出会いの場となり、ダンスパーティの場ともなっていた。RO を含め、現在の 50 代から 60 代の世代は、市場で開催されたダンスパーティの記憶を共有している。ダンスパーティで知り合い、結婚したという 60 代の夫婦もいる。この RO に比べて、RU が若かった時代には自由度は低かったと考えられるが、事例 5 で示したように、RU の若い頃にも、市場で異性と知り合うということがあった。女性たちによれば、市場や教会、マブリックの町に行く際には、美しいマンジュウツトを選ぶようになったという。軽く、美しいマンジュウツトを、女性たちは肩から提げるようになった。女性たちがマンジュウツトを肩から提げ始めたのは、市場を歩き回ったり教会へ行ったり

するためには、軽いマンジュウツを肩から掲げる方が実用であったということに加えて、自身を魅力的に見せたいという気持ちの表れであると考えられる。重いグラウツやジャンバウツを頭から掲げて運搬する女性の姿は力強い。マンジュウツを肩から掲げる姿は軽やかで、他村の人々や他言語集団の人々との出会いの場ともなる町という空間で、自身をより魅力的に見せたいという女性たちの気持ちの表れだったと考える。

かつて、初潮がきた女性には成女儀礼が行われていたが、現在ではほとんど行われることがない。成女儀礼で女性が網袋を頭から掲げて盛装したのは、1980年代に儀礼を受けた世代が最後だといわれている。筆者が観察した2000年代には、成女儀礼は恥ずかしいからと、初潮がきたことを言わない女性もでてきていた。自身を魅力的に見せたいという気持ちや、初潮を恥ずかしいと捉える感覚は、自身が女性であるという自覚が芽生えた結果のように思われる。網袋を頭から掲げる姿に象徴される母として性は、社会の再生産のためにあるように見えるが、網袋を肩から掲げる姿に象徴される女としての性は、社会の再生産のためというよりも、個人のものになったことを示しているように思われる。

一方、女性が肩からマンジュウツを掲げるという姿は、男性の姿と同じである。女性たちがマンジュウツを肩から掲げ始めたころ、その姿を、男性は容認することはできなかったと考えられる。男性が容認することができなかったのは、マンジュウツを肩から掲げる姿が、母親としての役割を果たさない女性に見えたからであったと思われる。「女は肩から網袋を掲げてはいけない」という言葉は、母としての役割を果たしていないように見える女性への批判である。また同時に、村の女性が、以前とは異なる範囲の男性と知り合うようになったことに対する、男たちの危機感を表していたと考えられる。「女が網袋を肩から掲げて、市場をぶらぶらする」という言葉は、女性が市場で男を探しているというニュアンスをもつ。

## 5. おわりに

本論文は、ジェンダーの変化を、モノを使用する行動様式の変化から明らかにすることを目的として、パプアニューギニア、アベラム社会における網

袋の上げ方の変化に関する語りを手掛かりに、近代化の過程におけるジェンダーの変化について考察した。

近代化の過程において網袋が変化し、女性の網袋の上げ方にも変化が生じた。本論文では、調査地において「女は肩から網袋を提げてはいけない」という言説が聞かれた時期を、1960年代から1970年代と推定した。当時は、社会的変化の大きな時期で、とくに市場の導入が、女性たちにとって重要であったと考えられる。「女は肩から網袋を提げてはいけない」という批判は、女性が肩から小型の網袋を提げる姿が一般化する1980年代までにはほぼ終息した。

網袋の上げ方に変化が生ずる以前、女性が頭から提げた網袋は、女性の母としての役割と生殖力を象徴し、男性が肩から提げた網袋は、男性の農作物の栽培者としての役割と生殖力を象徴していたことを示した。第一義的に女性の生殖力を象徴する網袋が、男性の成人儀礼においても用いられ、男性の生殖力をも示していた。網袋の上げ方からみえてくるこのジェンダーのあり方は、マッケンジーがテレホルの事例で分析したように、相補的な関係にあったと考えられる。

そして、女性が網袋を肩から提げ始めたのは、当初は、西洋人女性の真似であった。やがて、市場や教会、学校などのある町へ行くために、小さな軽い網袋を携行するのが実用であったために定着した。町という見知らぬ人と出会う可能性のある場で、軽い、美しい網袋を肩から提げる行為は、女性たちが、自身を魅力的に見せたいという気持ちの表れでもあった。女であるという自覚が芽生え、女性の性が社会の再生産のためにあるというよりも、個人のものになったことを示しているように思われる。男性による「女は肩から網袋を提げてはいけない」という言葉は、母としての役割を果たしていないようにみえる女性への批判であり、村の女性が以前とは異なる範囲の男性と知り合うようになったことに対する危機感であると考えられる。

近代化の過程で変化した網袋の上げ方から見えてきたものは、女であるという自覚をもった女性の出現である。女性たちが肩から提げた網袋は、もはや、母としての役割を象徴してはいない。このような網袋は、男女双方の人生儀礼で用いられることもない。本論文の事例からは、マッケンジーが先に

述べた相補性、相互依存性というジェンダーのあり方が、相補の度合い、相互依存の度合いを弱めていると結論づけることができる。近代化の過程における網袋の変化に関する研究を、本論文では、先行するジェンダー研究の成果に結びつけて論じることができたと思われる。

本論文では、アベラムという一事例を扱ってきたが、女性が網袋を肩から掲げるようになったという変化は、同時期に、パプアニューギニア国内で広く起こっていた現象である。網袋の掲げ方がジェンダーのひとつの指標となっていたパプアニューギニアでは、他の地域においても、ジェンダーのあり方や変化を論じるために、網袋への注目は有効であり続けているように思われる。

## 注

<sup>1</sup> この展示をみたクリフォードも、文化の真正性と異種混淆性の政治について述べた論文のなかで、網袋を紹介している。「網バックは伝統的に女性と関連づけられていて、実際おもに彼女たちによって製作されているのだが、いまではジェンダーの変化し、抵抗する役割の表現になっている」と述べ、網袋の展示に付けられた現地女性の言葉を紹介している [クリフォード 2002: 177]。

<sup>2</sup> アベラム語の表記は [Kundama et al. (eds.) 1987] の表記法を参考に、[Coupaye 2004] に依拠している。[Coupaye 2004] の表記法は、[Kundama et al. (eds.) 1987] を基礎とし、村人の助言を得て修正を加えたものである。アベラム語を、イタリック体で記す。なお、アベラム語の音を日本語で記す場合は、筆者が聞き取った発音を、音として近いと思われるカタカナで表記する。

<sup>3</sup> 行政村としてのニヤミクム村は、第1村から第4村まであり、筆者が滞在したのは第1村である。この第1村は、自然村ニヤミクムと自然村ワイマムが行政的にまとめられたものである。筆者は、自然村ニヤミクム側で多くの時間を過ごし、資料もそこで収集している。人々の社会関係には、現在でも自然村ニヤミクムとワイマムのまとまりが認められる。本文中、ニヤミクム村としているのは、自然村ニヤミクムである。

<sup>4</sup> ニヤミクム村には7つの父系クランがある。

<sup>5</sup> 「飾る網袋」という名称の由来は定かではない。ニヤミクム村では1980年代まで、成女儀礼の際に、初潮を迎えた女性にサーニン (*saanim*) という

デザインの網袋を背負わせた。サーニンというデザインは、赤と黒の横縞の三角形が連続して並んだデザイン（写真 5 参照）である。サーニンのデザインの網袋は、男性の成人儀礼でも、精霊堂の新築式においても用いられた。これに対して、日常的に用いられた網袋は、無地か単純なデザインのものばかりであったという。儀礼の場で用いられた網袋にサーニンのデザインが編み込まれていたことが、名称の由来ではないかと推定する。

<sup>6</sup> 嘔むと覚醒作用のある木の实。

<sup>7</sup> 網袋を形成しているのは「糸」だが、精霊堂の前面や祖先像に描かれた絵画は、「線」で描かれている。精霊堂や祖先像を描くのは男性である。網袋と男性のつくる物質文化の関係について述べたハウザーシュンプリンも、アベラム語では「糸」と「線」が同じ言葉であることを指摘している

[Hauser-Schäublin 1996:86]。さらに、この言葉が、サム方言では「我々」も意味していることは、象徴的な分析を行える可能性を示しており興味深い。

<sup>8</sup> ルルアイ (*luluai*) とは、植民地行政のもとで指名された村長である。トゥルトゥル (*tultu*) とは、ルルアイの補佐的役割をしていた人を指す。どちらもピジンイングリッシュであり、アベラム語と区別するために、イタリアック体に下線を付した。

<sup>9</sup> マブリック町近隣の村名である。

<sup>10</sup> アベラム語でマンブタツ (*maabutap*) という 1 メートル以上にも成長し、収穫後の展示儀礼で展示され、男性間の交換に用いられるヤムイモを、ここでは儀礼用ヤムイモとする。男性間の交換儀礼は現在では衰退してまったが、交換パートナーよりも大きなヤムイモを贈ることが男性の威信を高めたという。そのため、マンブタツを大きく成長させることに男性は価値を置いていた。マンブタツの実りは、その年の焼畑のすべての作物の成長を占うといわれている。その意味でも、マンブタツを大きく成長させることは、この社会にとって重要なことである。

<sup>11</sup> 第 4 階梯に達した男性は、精霊堂の正面のデザインと同じデザインが編み込まれた籠を提げることができたという。なお、サーニンのデザインは、男性の成人儀礼の場となっている精霊堂正面に、男性によって絵画として描かれ、成人儀礼で開示される祖先像にも描かれている。アベラムの場合は、テレホルのように男性が網袋に装飾を加えるのではなく、網袋に編み込まれたサーニンというデザインを、男性が精霊堂や祖先像などに描く。

<sup>12</sup> 先行文献には、いずれもウールと記載されていた。しかし、筆者が商店で購入した糸玉の帯にはアクリルと記載されていることから、先行文献を参照した部分ではウール、自身の一次資料を基にした部分ではアクリルと記述

する。

<sup>13</sup> ニヤミクム村で網袋の糸の材料として使用されていた植物は、3種類ある。それぞれ、アベラム語でイパ (*yēpa*)、セブ (*sēpē*)、ニヤムイ (*nyaamēny*) である。イパの学名は *Grossypium arboretum*、ニヤムイ (*nyaamēny*) の学名は *Gnetumgnemon* である。セブ (*sēpē*) はクワ科植物だが、学名は不明である。同定は、東京農業大学食糧情報学部、豊原秀和教授による。

<sup>14</sup> 染色の方法には、木の実などを直接糸に擦りつける方法と、土器で煮出す方法の二種類があった。擦りつける方法に用いられたのは、アベラム語でスクグル (*sēkēgēlē*) という黒い木の実、ワインバミスック (*waybamisēk*) という赤い木の実、ターヌ (*taanē*) という黄色のウコンの根である。スクグルはイラクサ科の植物であるが、学名は同定できていない。ワインバミスックの学名は *Bixaorellana*、ターヌの学名は *Curcuma sp.* である。土器での染色に用いた植物として、アベラム語で六種類の植物名を聞き取っている。それぞれ、グワウカーワ (*gwaaukaawa*)、ニヤムガ (*nyaamga*)、ワートブン (*waatbun*)、ブクセブ (*bēkusēpē*)、マラングセブ (*maarangēsēpē*)、アカケ (*akake*) である。グワウカーワの学名は、*Cordyline sp.* である。その他の植物についても高齢の女性に採取を依頼したが、人口増加と換金作物の畑の拡大のために森が後退し集落周辺では確認できず、同定していない。これらの植物と糸、または撚る前の繊維を、土器に交互に入れてバナナの葉で蓋をし、煮出して染色したという。

## 参考文献

Coupaye, Ludovic

2004 *Growing Artefacts, Displaying Relationships: Outlining the technical system of Long Yam cultivation and display among the Abelam of Nyamikum village (East Sepik Province, Papua New Guinea)*. Unpublished Ph.D dissertation, Sainsbury Research Unit for the Arts of Africa, Oceania and the Americas School of World Art Studies and Museology, University of East Anglia.

Garnier, Nicolas (ed.)

2009 *Twisting Knowledge and Emotions : Modern Bilums of Papua New Guinea*. University of Papua New Guinea.

Hauser-SchäublinBrigitta

- 1996 “The Thrill of the Line, the String, and the Frond, or Why the Abelam are a non-cloth Culture.” *Oceania* 67 (2) : 81-106.
- Kundama, J., P. Wilson, and A. Sapai  
 1987 *KudiKupukAmbulasTokPisin English Vol.10 of Papua New Guinea Dictionaries*. Ukarumpa of Papua New Guinea: Summer Institute of Linguistics.
- MacKenzie, Maureen Anne  
 1982 “Bilums” *Paradise*. No.38, Nov82-Jan83 : 21-25.  
 1991 *Androgynous Object : String bags and Gender in Central New Guinea*. Harwood Academic Publishers
- O’Hanlon, M.  
 1993 *Paradise: Portraying the New Guinea Highlands*. London: British Museum Press.
- Stent, W. R.  
 1984 *The Development of a market Economy in the Abelam*. Institute of Applied Social and Economic research.
- Strathern, Marilyn  
 1972 *Women in Between : Female roles in a Male World: Mount Hagen, New Guinea*. Seminar Press.  
 1981 “Culture in a Netbag : The Manufacture of a Subdiscipline in Anthropology.” *Man*. 16 (4) : 665-688.
- Thomas, Nicholas  
 1995 *Oceanic Art*. Thames & Hudson Inc.
- Weiner, Annette B.  
 1976 *Women of Value, Men of Renown : New Perspectives in Trobriand Exchange*. University of Texas Press.
- クリフォード、ジェームズ  
 2002 「パラダイス」『ルーツ 20世紀後期の旅と翻訳』毛利義孝ほか、(訳) 東京：月曜社 pp.173-214。

バーチル、エリザベス

1986『ニューギニア看護婦物語』巴辰男（訳）東京：ヒューマンドキュメント社